

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 上 岡 弘 二



吉枝聡子：現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究-テヘランの場合-

1. [執筆意図]

本博士論文は、現代ペルシア語（以下、ペルシア語）の敬語行動の実体を、社会言語学の研究手法で調査研究したものである。具体的には、テヘラン在住の216名から選択回答方式の調査票（12頁）に回答を得て、それを統計処理し、その結果を基に、ペルシア語の敬語行動を記述、解明しようとした、総329頁からなるものである。

本論文については、まず、そのテーマ設定の適切さを指摘してよいであろう。先行研究による蓄積がほとんど無いに等しいといってもよい、ペルシア語の敬語行動を、欧米の敬語理論、ならびに、独自の高い研究成果をもつ日本語の敬語理論をも十分に踏まえた上で、調査研究し、今後の研究の基盤となる一次資料を提供することを意図している。その執筆意図は十分達成されたと判定された。

2. [対象言語と研究手法]

先ず、研究対象であるペルシア語については、吉枝聡子氏は、これまでに、レフェリー制のある学術雑誌に3編の論文・研究ノートを発表しており、また、博士後期課程第3年度において実施した、言語調査の結果をとりまとめた英文モノグラフ *Sāri Dialect (Studia Culturae Islamicae No.56, Iranian Studies No.10)* の刊行により、平成8年度新村出記念財団研究助成金を受賞している。ペルシア語ならびに現代イラン系言語の研究者として、十分な研究能力を備えていることは、以上によって証明済みである。また、平成7～8年度日本学術振興会特別研究員（DC）であり、また、平成10年度よりは引き続き同PDに指名されていることも、その研究能力の高さを示すものである。本論文においても、ペルシア語の研究能力の高さは十分に発揮されていると判定された。

次に、その研究手法とした社会言語学に関しては、関連する先行研究を過不足なく押さえていること、調査票の内容・調査方法・荻野の数量化などの統計処理・処理結果のグラフ化・結果の解釈が妥当であり、さらに、上述したように執筆者の意図したところである、日本語の敬語研究の成果が適切に取り入れられていることが評価された。

3. [内容]

本論文で初めて明らかにされた、ペルシア語の敬語行動の諸事実は、まず、敬語行動の全体的傾向を、「上下敬語」型から「左右敬語」型へ移行しつつあると把握した後に、以下の点について報告されている：（1）ペルシア語の敬語行動型には、一般的な敬語使用と、上下関係の仮想的強調を表現するタアーロフの二つがある；（2）この両者を意識、使用の面で区別する姿勢は、特に高学歴層において顕著である；（3）上記の敬語行動の全体的傾向に従って、タアーロフは、「儀礼的な上下関係の強調」ではなく、相手への敬意と同時に、親近感も顕示するパターンへ向かいつつある；（4）社会属性グループごとの敬語運用面での差異は、1)性別、2)世代差、3)学歴差、4)地域差の4項目について記述され、ここでは省略するが、それぞれに興味深い事実が指摘されている。

以上の、本論文で確認された言語事実は、今回初めて学界に報告されるものであり、十分な学問的意義をもつものと判定された。

4. [コメント]

最終試験において、指摘された主要な注意点は以下の通りであった：

1) 社会言語学の周辺にかかわる諸現象にも言及するのが望ましい。また、イラン社会とペルシア語の関わりについても概論的に言及するのが望ましい。これと関連して、調査票に出てくる用例の、よりくわしい解説が必要である。

2) 全文ペルシア語の調査票に関して、日本語は敬語表現が豊富なのでそれなりの置き換えが可能であり、できれば、その翻訳を添付するのが望ましい。また、日本語による翻訳・解説をつける作業によって、より論理が明晰化する可能性がある。

3) 大部なものであるために読みにくい点がある。先ず全体像を見せてから個別の検討に入る、等の、読ませるための工夫が必要であろう。

4) 素材敬語をより詳細に取り扱うことが必要である。そうすることにより、今回の研究成果がより明確になってくる。

5) 執筆者自身が本文中に書いていることであるが、文学作品などの書き言葉のレベルでも同じことを検証してみる必要があり、それによって、より論点が説得力をもつ。

6) 執筆意図には入っていないが、タアーロフの全体像を把握し、タアーロフ自体を十分に分析する必要がある。

7) 調査票による調査結果の分析が中心であるためこれは当然といえるが、予備調査の段階で行った面接調査の成果を書き加えるとともに、談話分析を行うなど、現場を押さえた部分を追加する必要がある。

8) 社会的属性を中心にしているが、グループ内の個人的差異、個人の中の発話環境による差異にも十分考慮を払う必要がある。

9) 言葉の使い方に安心感がない箇所がいくつか指摘できる。さらに表現の厳密さと適切さを期すことが望ましい。

10) 今回は時間的な制約でその余裕がなかったとのことであるが、今回のデータを多変量解析にかけて、その結果を発表するようにしてほしい。

以上の指摘はいずれも、本論文の本質的な価値を問うものではなく、リライトする場合の要望が中心であった。

5. [結論]

本論文によって、ペルシア語の敬語行動の実態が初めて数量的に把握され、それを踏まえた新たな研究の枠組みが提示されたことによって、敬語使用に関する意識調査を含む継続調査、タアーロフに関する下位分類を含めた調査研究、都市と地方の敬語行動の差異の調査・解明、現場を押さえた非言語表現を含めむ調査研究などの、諸課題が新たに浮き彫りとなった。

本博士論文は、これまで類似の調査が皆無であったペルシア語を、初めて統計的手法を活用して、その敬語行動の実体を記述・解明したものとして、高く評価できる。また、本論文は、それにもまして、今後の現代ペルシア語の社会言語学的研究の基礎的な一次資料を学界に提供するものであり、最終試験での注意点を修正の上、できるだけ早い機会に英文での発表が要望される。

以上により、審査委員全員、博士号を授与するにふさわしいものと判定した。